

# 合意課題エクササイズを用いた クラブ・サークルリーダー学生の社会的スキルの育成

横山 孝行\*

Nurturing of Social Skills for University Student Club's Leaders by Consensus Task Exercise

Takayuki Yokoyama\*

The purpose of this study was to examine the effectiveness of educational program that aimed at nurturing of social skills for university student club's leaders by consensus task exercise. Ninety-four student club's leaders were selected for this program. This program was developed based on consensus task exercise from the structured group encounter. The result has shown that participants understood the characteristics of the realistic self in the discussion situation and realized necessity of conscientious communication. In addition, participants gained insight into leader's role in the student club activities. It was considered that such learning led to useful skills in actual discussion situations.

## 問題と目的

大学におけるクラブ・サークル活動は、学生達の自主的・自律的な活動である。そのようなクラブ・サークル活動は、学生の様々な成長を促すものと期待されている（日本学生支援機構，2007）。また、クラブ・サークルは学内のソーシャルサポート源にもなり、大学の不適応軽減に影響を及ぼす要因の一つにもなる（池田，2012）。

近年、筆者が学生相談機関カウンセラーとして勤めるA大学では、クラブ・サークルに入らない学生やすぐに退部する学生、廃部する団体が増加していた。A大学のクラブ・サークルを学生達が自らの手で立て直す際、「クラブ・サークルで部長等の役割に就くリーダー的役割の学生（以下、リーダー学生）」がキーパーソンになると考えた。リーダー学生は、部員等を日常的に束ねる役割であるため、所属するクラブ・サークルに高い影響力を及ぼす者と考えられるからである。そのため、リーダー学生がエンパワーされるような支援を模索し始めた。まずは、A大学のリーダー学生を対象にニーズ調査を行った。その結果、「リーダーとして自信がもてない」という困惑や「集団としてまとまらない。集まりが悪い」という困難等が見出された（横山，2011）。

池田・古川（2005）によれば、リーダーの自信とは「リーダーに必要とされる具体的な役割行動の可能感」であり、自己効力感の効力期待と近接した概念であるという。A大学のリーダー学生におけるリーダーの自信の規定要因として、社会的スキルが実証的に見出されている（横山，2014）。なぜ、社会的スキルがリーダーの自信の規定要因となるのだろうか。リーダー学生は所属団体内の部員に限らず、自身の所属団体の活動に必要なことについて、部外者（大学職員や学外者など）と検討・交渉したり、話し合

ったりすることが求められることがある。実際に、A大学では体育系と文化系のそれぞれにおいて、各団体のリーダー学生達が定期的に集まり、学内行事などに関することを話し合う場がある。そのため、リーダー学生は、様々な人と円滑に関わることができる対人技能（社会的スキル）を持つ必要がある。高い対人技能であれば、クラブ・サークル活動上の様々な課題に対処することができ、達成感が持てるため、結果的にリーダーの役割行動の可能感も高まることが予測される。これらのことから、リーダーの自信を持つために、リーダー学生の社会的スキルを伸ばす支援方略が考えられる。

構成的グループ・エンカウンター（以下、構成法）のエクササイズは、大学生の社会的スキルを向上させることが明らかになっている（山本ら，1992；山本，1996；山本，2001）。構成法とは、自己・他者・集団との出会いを目的とした集団体験方式の心理教育活動であり、エクササイズとはねらいを達成するために用意された課題や実習である（山本，2001）。構成法のエクササイズの効果原理は2つ考えられている。エクササイズの協働作業の体験や成果に基づいて「やればできる」「思っていたより、やりえた」という自信・達成感・成長感が芽生える“うらうち効果”と、自身に関する観念知（認知の甘さや楽観）がエクササイズを通してゆさぶられて実践知（より現実的な自己への気づき）へなる“ゆさぶり効果”である（山本ら，1992；山本，2001）。

ところで、大学のクラブ・サークルにおいて、当該の団体の活動の方向性や計画を正式に決める手段は、部員同士の討議である。それは、先述したようにクラブ・サークル活動は学生の自主的・自律的な活動であるため、活動内容や活動頻度、行事（試合や学園祭など）への参加の有無などは部員同士で話し合うべき内容であり、そして、団体と

\* 東京工芸大学学生支援センターカウンセラー  
2015年9月15日 受理

して意思決定する必要もある。先行研究をみると、リーダー学生が所属団体の中で「建設的な話し合いができてい」という認知の程度は、「部員の参加率」や「団体の集団凝集性の認知」と正の相関関係であった(横山, 2012)。つまり、部員同士の討議の質は団体の存続に関わる大きな要因と考えられる。しかし、先述のリーダー学生のニーズ調査結果では、集団としてのまとまりや集まりの悪さが見出されている(横山, 2011)ことから、実際のA大学のクラブ・サークル内では、上手く話し合いができていない団体が少なくないと推測される。これらのことから、クラブ・サークルにおいてグループとしての意思決定が行えるようになるために、まずはリーダー学生が討議に関する社会的スキルをみがくことが重要と考えた。

構成法のエクササイズの中に、合意課題エクササイズがある。合意課題エクササイズとは、複数の選択肢に、まず各個人が重要度にそって順位づけ(個人決定)をし、次にグループ討議によって合意(意見の一致)のもとで順位づけ(グループ決定)をなす課題である(山本, 2001)。合意課題エクササイズは、自分の意見をはっきりと主張する必要がある一方で、合意に向けて他人の意見をしっかり聴く必要もあるため、お互いの考えをよく理解でき、納得できないまま数の論理で決定するよりもはるかにコンセンサスがとれるといわれている(高, 2009)。合意課題エクササイズは、リーダー学生が少人数による討議の社会的スキルをみがくための適切な方法であると考えられる。これまでの先行研究をみると、合意課題エクササイズは大学教育において授業の一環として行われることが多かった(山本, 1994; 有沢, 2003; 高, 2009)。また、大学生以外にも高校生(稲垣ら, 2004)や中学・高校教師(鈴木ら, 2007)、不登校生徒(有沢, 2003)を対象に行われてきた。しかし、リーダー学生を対象にした合意課題エクササイズの実践研究は見当たらないため、本研究は希少である。

本研究は合意課題エクササイズを用いたリーダー学生の社会的スキル育成の成果について検討することが目的である。

## 方法

### (1) 対象者の属性

2014年9月中旬に、A大学のリーダー学生94名を対象に実施した。対象者の属性は男子学生が72名、女子学生が22名で、1年生が10名、2年生が55名、3年生が29名であった。所属団体の種別は体育系団体が28名、文化系団体が62名、委員会などのその他は4名であった。

### (2) 合意課題エクササイズの概要

本実践では「話し合い場面の自分の特徴について考えること」「自己主張スキルを高めること」「お互いの考えを知りあうこと」をねらいとして、合意課題の「タイタニックの乗客」を行った。有沢(2003)は、タイタニック船沈没による人命救助場面での合意課題は、架空の状況設定であるため課題への抵抗感が和らげ、人間の生命に関わる合意であるため真剣な話し合いが期待でき、比較的短時間で行うことが可能であると述べている。そのため、「タイタニックの乗客」を選択した。なお、「タイタニックの乗客」で用いる乗客リストの特徴は有沢(2003)と同様の内容を使用した(表1)。

エクササイズは有沢(2003)の手順を参考に行った。具体的な手順は次の①～⑥である。①一組6～7人のグループを作った。②エクササイズのねらいと概要を説明した。一人一枚、乗客リストを配布した。状況設定は、リーダー学生達が豪華客船に乗船している時に、氷山にぶつかり、沈没する前にどの乗客から救命するかというものである。③個人作業として、乗客リストを見ながら、それぞれ誰から順番に救助したいかを順位づけさせた(個人決定)。④

表1 有沢(2003)の乗客リスト

職業	年齢	性別	使命・乗船理由	健康状態	家庭・恋愛	順位
政治家	50代	女性	自分の余命を知り福祉の充実に力を入れる。高額寄付をすることも。海外の社会福祉の視察のため乗船。	ガンのため、後1年しか生きられない。	離婚歴あり。子どもなし。	
フリーター	10代	女性	18歳の時、宝くじで1億円を当てて以来、くじや懸賞など運とお金だけを頼りに生きてきた。今回の乗船も懸賞で当たった。	ダイエット中で食事は1日2食にしている。	スタイルも良く、キレイな女性だが、男運に恵まれず、生涯独身でいる予定。	
俳優	20代	男性	今、大人気の俳優でドラマやCMなどに多数出演し、将来も期待されている。初の主演映画の撮影のために乗船。	実は水虫に悩まされている。	幼なじみと婚約している。	
マンガ家	30代	男性	30歳でようやく花開いたマンガ家で、20代の女性に熱狂的に支持されている。マンガの取材のため乗船。	睡眠と栄養が不足。栄養ドリンクが欠かせない。	新婚ほやほや。妻は妊娠中。	
探偵	50代	男性	腕のいい名探偵。様々な難事件を解決し、多くの人から非常に感謝されている。依頼料は高額。事件の調査のため乗船。	右手が不自由である。	独身。老犬と一緒に暮らしている(今回は近所の方に預けている)	
教師	40代	女性	中学校の教師であり、いじめ問題に積極的に取り組んでいる。生徒からの信頼も厚い。休養のため乗船。	仕事が多く、過労気味である。	夫と二人暮らし。子供はいない。	

個人決定後、筆者から「本エクササイズでは、合意を“双方の意思を一致させること”と定義する。人によって意見が異なることは自然である。だからこそ、お互いが納得できるように話し合うことが重要である。今から、一人一人の意見を大切にしつつ、グループメンバー全員が納得するまで話し合い、合意によって、グループとしての救助順位を決めてください」と教示した。また、話し合う際に6つのルールを設定し、守るように促した。具体的には、「すぐにあきらめて他人の意見に従わない」「自分の意見にこだわり過ぎない」「多数決を取らない」「中間(平均)を取って決めない」「今あなたの意見に従うから、次は私の意見に従って欲しい等の取引をしない」「グループメンバーを傷つけるような言動はしない」の6つである。⑤グループで話し合い、グループの順位が決めた(グループ決定)。グループ決定の順位は、グループ用シートにその順位と理由を書かせた。なお、グループ用シートは研究使用を目的に、本プログラム終了時に回収したいことを伝え、承諾したグループは提出させた。グループ討議中、筆者は各グループを巡り、観察されたことをメモにとり、同時に話し合いが促進するように援助的な介入を行った。⑥いくつかのグループに、グループ決定の順位を発表させた。

合意課題のエクササイズの成果を検討するために、実施後にアンケートの回答を求めた。アンケート内容は有沢(2003)を参考に、「合意課題のエクササイズを通して学んだこと、考えたこと、気づいたことを教えてください」と教示し、自由記述式で記入させた。その際、回答は任意であり、アンケート内容を研究目的のために分析するが、分析結果は個人が特定されぬように公表することを伝えた。

### (3) 合意課題の実践的文脈

合意課題のエクササイズはリーダー学生を対象にした研修プログラムの中の一つのステップとして行われた。合意課題エクササイズ前後の研修内容が、リーダー学生の思考・感情やアンケートの回答に影響を及ぼす可能性がある。そのため、研修プログラム全体のプロセスなど、合意課題が行われた文脈を示す必要があるだろう。具体的には研修プログラムの経緯、内容の検討過程、プログラム全体の概要を示す。

#### ①経緯とプログラムの検討過程

A 大学では、学友会(全学部生が所属する学生自治団体)の本部が主催となって、毎年、夏季休暇中及び春季休暇中に、リーダー学生を対象にした「リーダーズキャンプ」という研修が行われている。2014年7月に、学友会本部の学生からA大学の学生相談機関のカウンセラーの筆者に対して、2014年度の夏季休暇中のリーダーズキャンプにおいてリーダーシップに関する研修依頼があり、プログラムを実践することとなった。

プログラムの計画は、次の2つの観点を考慮して行った。1つ目は、大学のクラブ・サークルは学生達の自主的・自

律的な活動であるため、リーダー学生が自らの手によって所属団体を導くような力を獲得させることが重要と考えた。すなわち、リーダー学生は集団活動に関する知識やスキルを獲得できるような支援方略(横山, 2011)を用いた。2つ目は、学友会本部は日常的に各団体を束ね、支える組織であるため、プログラムが学友会本部の意向と整合性を持つことが必要と考えた。そのため、プログラムの計画は学友会本部の学生3名と行った。具体的には、学友会本部から見て、現在のリーダー学生やクラブ・サークルに必要なことは何か尋ね、その内容を参考にしてプログラムのたたき台を筆者が考え、講話資料やエクササイズで用いるワークシートを作成した。

なお、学友会本部の学生達に、プログラムの資料やワークシートの中の言葉の表現が理解しやすいか確認してもらったり、エクササイズがA大学の学生にとって興味深いものになっているかについて意見を求めたりした。また、筆者と学生による検討のみでは、立場上、学生より筆者の方が権威的になりやすい構造であるため、偏ったプログラム内容になる可能性がある。そのため、クラブ・サークルに関する担当事務部署(学生課)の職員に、プログラム内容のチェックを依頼し、確認してもらった。

#### ②プログラム全体の概要

プログラム全体の目的は、リーダー学生の「リーダーシップを高めること」とした。プログラムの概要と工夫点を巻末資料1に示した。巻末資料1の括弧の中の分数は各ステップにかかったおおよその時間である。当日は、筆者が一人でプログラムをレクチャー及びファシリテートを行った。前半はクラブ・サークルに関する先行研究や、人間関係や集団活動に関する心理学的知見に基づいた知的学習である。リーダー学生が人間や集団に関する知識を持つことで、所属団体を理解する枠組みの一助となると考えた。後半は構成法によるエクササイズを用いた体験的学習である。リーダー学生の社会的スキル育成の観点から、本プログラムでは構成法によるエクササイズを採用した。

また、先述した合意課題のエクササイズに対する自由記述式のアンケート以外にも、プログラム全体に対するアンケートも行った。具体的には横山(2013a)を参考に4件法で「研修内容は理解できたか」「研修内容は今後のクラブ・サークル活動に役立ちそうか」「研修内容は満足するものだったか」「今後も集団の活動や運営についてもっと学んでみたいか」という設問の回答をさせた。

## 結 果

### (1) 合意課題エクササイズ時の様相

当日は15のグループが作られた。プログラムの計画段階では「タイタニックの乗客」を行う時間は30分間の予定であった。しかし、実際の実施場面では25分が経過した時点でグループ決定の順位づけができていないグループが多かった。エクササイズのねらいを達成するためにはもう少し合意に向けた話し合い体験を積む必要があると



判断した。そのため、筆者からリーダー学生達に本エクササイズを5分間延長しても良いか、すなわちリーダーズキャンプのプログラム終了時刻が5分延長しても良いか尋ね、挙手の有無で意思を確認した。ほとんどのリーダー学生が挙手したため、時間を延長した。結果的に合意課題エクササイズは計35分間を費やした。

実際の討議場面では、まずは一人ずつ個人決定の順位を発表するグループがほとんどであった。次に、自発的にメンバー全員の順位を簡易な表にまとめているグループが多いことが観察された。グループ決定は1位または6位から順番に順位を決めたり、合意した順位からシートに書き出したりしていた。話し合いを始めた当初は前傾姿勢になって意見を主張していた者が多かったが、グループ決定の順位が進まないグループでは次第に後傾姿勢となる者が増えていった。

### (2) グループとしての順位

全てのグループから、グループ用シートが提出された。その結果、15グループ中8グループが1位から6位まで順位を決めていた。全グループ(A~O)の順位、平均値(標準偏差)及び最頻値を表2に示す。

グループ決定による順位の平均値と最頻値の観点から

みると、最も救助したいと考えられた乗客は「マンガ家」であった。次いで、「俳優」が考えられていた。「教師」と「探偵」は、順位の平均値が3.5位と同じであったが、順位の最頻値はそれぞれ3位と4位であった。また、「政治家」と「フリーター」も、順位の平均値が4.8位と同じであったが、順位の最頻値はそれぞれ5位と6位であった。

グループ用シートに記載された各乗客に対する順位理由を表3に示した。「マンガ家」が1位になった理由は、「奥さんが妊娠中なので将来の可能性」や「新婚だから子どもが生まれた時に一緒にいて欲しい」という家族重視の観点や、「やっと花開いたマンガ人生」や「読者が悲しむから」という仕事または社会的影響力の観点からであった。そのような家族や仕事、社会的影響力の観点は、グループの中で高順位とされた他の乗客の順位理由にもみられた。また、多くのグループで低順位とされた「政治家」と「フリーター」の理由は、「健康状態が悪い(5位)」や「社会貢献度が高いが、余命1年だから(6位)」という健康の観点や、「定職についていない(6位)」や「社会貢献していないから(6位)」という社会参加の観点からであった。

### (3) 合意課題エクササイズの体験

リーダー学生にとって合意課題のエクササイズ体験は、

表2 合意課題「タイタニックの乗客」のグループ順位

	政治家	フリーター	俳優	マンガ家	探偵	教師
A	2位	6位	5位	4位	1位	3位
B		6位	2位	1位		3位
C	5位	6位	2位	1位	4位	3位
D	2位	6位				
E	5位	6位	2位	1位	4位	3位
F		3位	6位			
G		6位			4位	5位
H	6位	1位				
I	6位			4位	1位	5位
J	5位	6位	3位	1位	2位	4位
K	6位	1位				
L	5位	6位	2位	1位	4位	3位
M	6位	3位	2位	1位	5位	4位
N	5位	6位	2位	1位	4位	3位
O	4位	5位	3位	1位	6位	2位
平均値	4.8位	4.8位	2.9位	1.6位	3.5位	3.5位
標準偏差	1.4	1.9	1.5	1.3	1.7	0.9
最頻値	5位	6位	2位	1位	4位	3位

アルファベットは各グループを表す

表3 各乗客に対する主な理由とその順位

政治家 ・世界に影響がある人だから。(2位) ・家族がいない。待っている人がいない。(5位) ・健康状態が悪い(5位) ・社会貢献度が高いが、余命1年だから。(6位) ・十分に生きたのではないか。(6位)	マンガ家 ・奥さんが妊娠中なので将来の可能性。(1位) ・新婚だから子どもが生まれた時に一緒にいて欲しい。(1位) ・やっと花開いたマンガ人生。(1位) ・読者が悲しむから。(1位) ・事件を後世に伝えるマンガにする。(1位) ・若い。今が一番幸せそう。(4位)
フリーター ・10代だから将来がある。(1位) ・社会貢献していないから。(6位) ・定職についていない。(6位) ・運がいいから生き残る。(6位) ・子孫を作る気がないから。(6位)	探偵 ・右手が不自由だから助けてあげよう。(1位) ・社会に役立っているから。(2位) ・頑張っているから。(2位) ・家族がいないから。犬は近所の人に任せる。(4位) ・他にも探偵がいるから。(4位) ・もう人生を楽しんだから。(6位)
俳優 ・婚約しているのでお子さん誕生の期待。(2位) ・俳優として期待されている。(2位) ・幼なじみが待っているから。(2位) ・メディア(世間)側から見て影響力がデカイ。(2位) ・20代男性で健康状態が一番良い。(6位)	教師 ・身近に悲しむ人が多いから。(2位) ・休養中であり、あまり重要な仕事ではない。(3位) ・良い人、生徒が悲しむ、夫いる。(3位) ・人間的にできた人だから。(4位)

どのような学びや気づき等があったのか。合意課題に関するアンケートに記された内容を基に検討する。分析方法は、アンケート内容を繰り返し精読し、意味内容が類似したものをまとめた。その結果、7分類に整理された(表4)。『①説得・調整の難しさ』とは、異なった価値観を持った者達が、相互に説得し合うことや、一つの意見をまとめることの困難さを実感した内容であった。『②多様な視点の面白さ』とは、同一情報であっても、人によって視点や価値観が違うことに面白さを感じる内容であった。『③自己の特徴理解』とは、話し合い場面での自身の特徴や課題点、取り組み姿勢等について気づいたことであった。『④意見の再検討』とは、他者の意見によって自身の考え・価値観を修正したり、見直したりすることを言及した内容であった。『⑤丁寧なコミュニケーションの必要性』とは、話し合いにおいて、個人の思考プロセスを述べ合うことや自身の中である程度考えを整理して発言すること、口火を切ることの大切さ等について述べられた内容であった。『⑥所属団体の活動に応用』とは、合意課題の中で重要だと思ったことを実際のクラブ・サークル活動に結び付けて考えた内容であった。また、『⑦その他』として、自身のグループではよく話し合えたことや、危機的状況では冷静な分析が必要であること等があった。

#### (4) プログラム全体に対する評価

合意課題エクササイズを含めた当日のプログラムに対して、リーダー学生はどのように評価したのか。プログラム全体に対するアンケート結果を表5に示す。全てのリーダー学生が研修内容を「よく理解できた」または「やや理解できた」と回答した。また、約9割のリーダー学生は「修内容が今後のクラブ・サークル活動に役立つ(とても役立つ

つと思う+やや役立つと思う)」と認識し、「研修内容に満足(とても満足している+やや満足している)」していた。そして、約8割のリーダー学生は「今後も集団の活動や運営について学んでみたい(非常に思う+やや思う)」と回答していた。

#### 考察

##### (1) 合意課題エクササイズの成果の検討

はじめに、リーダー学生の参加態度を検討する。多くのグループでは自発的に各メンバーの順位を簡易な表にまとめ、前傾姿勢となって意見を主張する者が多かったことが観察された。また、筆者が当初の予定時間よりも延長したいことを尋ねた際に、ほとんどのリーダー学生は承諾した。これらのことから、多くのリーダー学生は意欲的に合意課題エクササイズに取り組んだ様相がうかがえる。それでは、なぜ意欲的に取り組んだのだろうか。「タイタニックの乗客」という合意課題エクササイズは抵抗感を和らげ、真剣な話し合いが期待できる(有沢, 2003)。そのような合意課題エクササイズが持つ特性が、A大学のリーダー学生においても発揮したと思われる。また、合意課題エクササイズの前に「整列しよう」と「共通点探し」というエクササイズが会場内や各グループのアイスブレイクとなつて、リーダー学生達はスムーズに討議に取り組めたのではないかと。さらに表5から読み取れるように、8割近くのリーダー学生が研修内容は今後のクラブ・サークル活動に役立つと思っていた。つまり、多くのリーダー学生は、当日のプログラムそのものが自身の活動にとって意味のあるものと認識していたと捉えることができる。有意義に感じられるプログラムの中で、合意課題エクササイズを行ったことで、リーダー学生は意欲に取り組むことができたかと考

表4 合意課題を通して学んだこと・考えたこと・気づいたこと（抜粋）

①説得・調整の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>一人だけ意見が違ったときがやはり難しい。多数派が説得するのも、一人が他全員を説得するのも。</li> <li>人それぞれに異なる考えがあり、納得できるものが多かった。しかし、それで考えを全く変えてくれるわけではないのが印象的だった。考え方を変える、変えさせることの難しさを実感した。</li> <li>違った価値観を持った人同士の話し合いで、まとめるのは大変だと思った。</li> </ul>
②多様な視点の面白さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分は順位を社会的、経済的な面を中心に選んでいたが、他の人は幸福感、見た目や健康状態で選んでいる人が多かったので、いろいろな考え方があると思った。</li> <li>人は同じ資料を見ていても、考えている事は違うとわかった。</li> <li>自分以外の人と全く意見が違ったりして、話し合う事が楽しかった。</li> </ul>
③自己の特徴理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分は押しに弱いなと思いました。これから部長になるので、押し負けないようにしたい。</li> <li>相手を納得させるような意見、言葉づかいが自分には足りていないと感じた。</li> <li>あなたが助けたいと思うという、自分の気持ちを第一として考える前提を無視して考えていたことに気づいた。</li> </ul>
④意見の再検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分には無い意見が出てきて、それに対する反対意見や同意見が次々と思い浮かんできた。人の意見は自分にまた新たな意見を生み出してくれる大切な素材だと思った。</li> <li>自分だけだと気づけないところに気づけて、自分の意見を見直すことができた。</li> <li>自分の価値観が話し合いの中で大きく変わった。</li> </ul>
⑤丁寧なコミュニケーションの必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>結果のみでなく、それに至るまでの過程を述べることによって、より多くの人から理解と共感が得られるのだと思いました。</li> <li>意見を言う時はあたり前だがあらかじめ自分の中で言葉にまとめていないとあまり伝わってこないを実感した。</li> <li>初対面のグループでも一人が先陣をきって話し始めると会話が進むことに興味した。</li> </ul>
⑥所属団体の活動に応用	<ul style="list-style-type: none"> <li>意見が強い人同士が同じ立場で話をするのと全くまとまらない。一步上の立場であるリーダーの役割はそれをまとめることでもあるのだろうか。</li> <li>まとめる人がいない限り結局決まらなくなってしまふ。こういうことはサークル・クラブ内の話し合いでもよくあることだろう。だから、まとめていく力を持つことが重要だと思った。</li> <li>自分の意見を通そうとも思ったが、納得する意見が出た時には、途中で引こうと思った。これはサークル、クラブ内でもしっかり話を聞いて納得する部分は相手の意見を取り込んでいかなければと感じた。</li> </ul>
⑦その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>今回は考えの違う6人が集まった中では、話し合いはできたのではないかと思います。</li> <li>危機的状況下にある中で、情報を冷静に分析しなければならないということに深く考えさせられた。</li> <li>そもそも紙で判断する事が間違い。現場にいたなら真っ先に若くてキレイな人を助ける。</li> </ul>

表5 プログラム全体に対する評価

	全く理解できなかった 0名(0.0%)	あまり理解できなかった 0名(0.0%)	やや理解できた 51名(54.3%)	よく理解できた 43名(45.7%)
内容は理解できたか				
内容は今後のクラブ・サークル活動に役立ちそうか	全く役に立たないと思う 0名(0.0%)	あまり役に立たないと思う 8名(8.5%)	やや役に立つと思う 63名(67.0%)	とても役に立つと思う 23名(24.5%)
内容は満足するものだったか	全く満足していない 0名(0.0%)	あまり満足していない 7名(7.4%)	やや満足している 64名(68.1%)	とても満足している 23名(24.5%)
集団の活動や運営についてもっと学んでみたいか	全く思わない 2名(2.1%)	あまり思わない 16名(17.0%)	やや思う 53名(56.4%)	非常に思う 23名(24.5%)

えられる。

意欲的にエクササイズに取り組めた様相が推測されるが、それでは、リーダー学生にとって合意課題エクササイズはどのような成果があったのだろうか。表4の分類された内容を基に“うらうち効果”と“ゆさぶり効果”（山本ら, 1992; 山本, 1996）の観点から検討する。以下、< >は記述されたローデータを示す。なお、『⑦その他』を除いて考察する。

15グループ中7グループが1位から6位までのグループ決定ができなかった。グループ決定ができなかった要因は何だろうか。リーダー学生は、話し合いの中で『多様な視点の面白さ』を感じ、自身の『意見を再検討』させることをできた者がいた。しかし、リーダー学生は『説得・調整の難しさ』として、<一人だけ意見が違ったときがやはり難しい。多数派が説得するのも、一人が他全員を説得するのも>やく人それぞれに異なる考えがあり、納得できるものが多かった。しかし、それで考えを全く変えてくれるわけではないのが印象的だった>、<違った価値観を持った人同士の話し合いで、まとめるのは大変だと思った>等の記述をしていた者がいた。つまり、リーダー学生は他者の意見を受け入れる態勢はあったが、他者に自分の意見を受け入れてもらうような働きかけ方や多様な意見を統合させることに苦労したと思われる。そのような苦労から、グループ決定が上手くできなかったグループが生じたのかもしれない。その苦労も含めた討議の過程がうらうちとなって、リーダー学生は<結果のみでなく、それに至るまでの過程を述べることによって、より多くの人から理解と共感が得られるのだと思いました>やく意見を言う時はあたり前だがあらかじめ自分の中で言葉にまとめていないとあまり伝わってこないと実感した>等、『丁寧なコミュニケーションの必要性』を感じたと考えられる。また、リーダー学生の中には<意見が強い人同士が同じ立場で話をすると全くまとまらない。一歩上の立場であるリーダーの役割はそれをまとめることでもあるのだろうか>やくまとめる人がいない限り結局決まらなくなってしまう。こういうことはサークル・クラブ内の話し合いでもよくあることだろう。だから、まとめていく力を持つことが重要>等を記述した者がいた。これは、合意体験がうらうちとなって、日常の『所属団体の活動に応用』した方が良い役割を見出したといえる。以上のことから、今回の合意課題エクササイズは“うらうち効果”として、リーダー学生に討議場面における丁寧なコミュニケーションの必要性やリーダーとしての役割を実感させたと捉えることができる。

リーダー学生は『自己の特徴理解』として、<自分は押しに弱いなと思いました>やく相手を納得させるような意見、言葉づかいが自分には足りていないと感じた>等、自身の至らない点に関する内容を記述した者がいた。これは、今回の合意に向けた討議体験をとおして、実際の自分の言動を知ることができ、その結果として自身の至らない点に気がついたと思われる。至らなさ以外にも、<自分の

気持ちを第一として考える前提を無視して考えていたことに気づいた>等、自身の思考の特徴について振り返った者もいた。これらのことから、今回の合意課題エクササイズは“ゆさぶり効果”として、より現実的な自己への気づきを促したと解釈することができる。

上記の検討から、リーダー学生にとって合意課題エクササイズの成果は、討議場面における現実的な自己の特徴を知り、丁寧なコミュニケーションの必要性を実感し、実際のクラブ・サークル活動のリーダーとしての役割の示唆を得たことと考えられる。リーダー学生が得たこれらの学びは所属団体内で実際に討議する場面において、直接的に役立つスキルとして解釈することができる。

## (2) 今後の課題

はじめに、実践上の課題について検討する。本実践では、15グループ中7グループが1位から6位までのグループ決定ができなかった。これは、『説得・調整の難しさ』もあるが、リーダー学生にとって合意課題エクササイズに取り組む時間の短さが関係すると考えられる。大学生を対象とした先行実践では、正課授業の中で90分という時間をかけて合意課題エクササイズが行われていることが多い（山本ら, 1992; 山本, 1994）が、本実践では35分間だった。今回は時間設定が短過ぎたのかもしれない。ただ、現実的には、正課外教育の一環として、リーダー学生達を集めてプログラムを実践する際、学生にとっても実践者にとっても、日程や時間の制約がある。そのような状況の中で合意課題を実践する際、「タイタニックの乗客」にこだわらず、合意課題の他のモデルや型（山本, 2001）を視野に入れて、より短時間で成果が得られるエクササイズの設計・開発することが今後必要である。

先述したように構成法のエクササイズが大学生の社会的スキルを向上させることが見出されており、今回はその介入仮説に基づいて実践された。ただ、本研究では、合意課題エクササイズによるA大学のリーダー学生の社会的スキル向上を実証的に明らかにしていない。研究上の課題として、今後は合意課題エクササイズがA大学のリーダー学生の社会的スキルの変化を標準化された尺度を用いて検証することが必要である。また、本研究では、リーダー学生が合意課題エクササイズから得られたこと（討議場面における現実的な自己の特徴の理解、丁寧なコミュニケーションの必要性を実感、実際のクラブ・サークル活動でリーダーとしての役割の示唆を入手）が、実際のクラブ・サークル活動にどのような影響を及ぼしているのかについて明らかにしていない。今後の課題として、フォローアップ研究が求められる。

## 文 献

有沢孝治 2003 不登校学級における合意課題の活用と成果—生徒の感想とリーダーによる観察を中心として—。日本カウンセリング学会第36回大会発表論文集, 188.



- 有沢孝治 2003 合意課題の実践によるコミュニケーション能力の育成に関する検討—看護学生への実践事例を通じて—。東海大学紀要（教育研究所），11，105-120.
- 池田浩・古川久敬 2005 リーダーの自信研究の新しい展開—その概念と測定尺度および自信の源泉—。九州大学心理学研究，6，119-131.
- 池田満 2012 大学生の大学適応を促すサポート源としてのサークル活動の効果—適応促進へ向けた組織的方略への示唆—。日本コミュニティ心理学会第15回大会プログラム・発表論文集，48-49.
- 稲垣応顕・小林真・丹保弘則・土合智子・山岡和夫・多賀香世子・菅原千香子・川上純子・池上道子・島美恵子 2004 高校生に及ぼす構成的グループエンカウンターの効果。富山大学教育実践総合センター紀要，5，123-129.
- 日本学生支援機構 2007 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」—。
- 酒井朗・安藤めぐみ 1998 課外活動にみる現代大学生の人間関係。お茶の水女子大学人間発達研究，21，1-15.
- 鈴木郁子・杉山郁子・桐林真紀・森田美弥子 2007 学校教師の共感性を向上させる研修—「ラボラトリー方式の体験学習」におけるシェアリング効果の検討—。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学，54，11-28.
- 高賢一 2009 コンセンサス法の意義と課題。教育経営研究，15，108-116.
- 山本銀次・張華芳・田部理恵 1992 社会的スキルの認知変容。東海大学紀要（文学部），58，27-41.
- 山本銀次 1994 コンセンサス課題と青年の意識。東海大学紀要（文学部），61，37-57.
- 山本銀次 1996 社会的スキルの問題と構成法の活用。放送教育開発センター研究紀要，13，89-104.
- 山本銀次 2001 エンカウンターによる“心の教育”—ふれあいのエクササイズを創る—。東海大学出版会。
- 横山孝行 2011 大学のサークル支援に関する一考察。東京工芸大学工学部紀要（人文・社会編），34（2），8-14.
- 横山孝行 2012 大学の部活・サークルにおける集団凝集性と参加率に関する研究。東京工芸大学工学部紀要（人文・社会編），35（2），73-82.
- 横山孝行 2013a 「リーダーとしての自信」向上を目指した教育プログラムの試み—クラブ・サークルの部長を対象として—。学生相談研究，33（3），272-285.
- 横山孝行 2013b 大学のクラブ・サークルリーダーを対象としたリーダーシップの育成。東京工芸大学工学部紀要（人文・社会編），36（2），1-8.
- 横山孝行 2014 リーダーの自信に関する諸要因の検討—大学のクラブ・サークルリーダーを対象として—。東京工芸大学工学部紀要（人文・社会編），37（2），1-6.



## 巻末資料1 プログラム全体の概要と工夫点

1. 筆者の自己紹介 (3分)
2. プログラムの概要を説明 (7分) 本プログラムの目的と内容、参加姿勢について説明した。 (工夫点) 本プログラムの参加のレディネスを整えるためには、目的と内容について説明した。また、参加意欲を高めるためとプログラム内容を自分に引き寄せて考えてもらうために、本プログラムに求める参加姿勢として、「自身の所属団体をより良くしたいという気持ちを持って参加して欲しいこと」「内容を鵜呑みにせず、自分の中で吟味して欲しいこと」を説明した。
3. リーダーとリーダーシップの違いについて説明 (5分)
4. クラブ・サークル運営の困難さについて説明 (12分) 酒井・安藤 (1998) の研究から、1997年当時のリーダー学生においてもクラブ・サークル運営が困難であったことを説明した。また、なぜ運営が困難になるのかをクラブ・サークルの構造的特徴から説明した。 (工夫点) プログラムの導入的な意味合いで、まずは他のリーダー学生達が考えていたことを示し、プログラムへの興味・関心を引き出すことをねらって行った。また、クラブ・サークル運営が困難なことは“自分だけではない”と知ることで、自責感の軽減をねらって説明した。
5. リーダーシップの発揮について説明 (13分) 人間関係は継続的な相互作用によって形成されることや、集団活動は課題達成機能と関係維持機能が両輪となって展開していくことを説明した。そのような人間関係や集団活動において、リーダーシップを発揮するための基本的な行動を説明した。ここでは、過去のリーダーズキャンプにおいて、エクササイズの中でリーダー学生達が考えた理想的なリーダーシップ行動を参考にし (横山, 2013b)、その行動を実行するための具体的なスキルや心構えも説明した。 (工夫点) A大学の先輩が考えたリーダーシップ行動であるため、リーダー学生にとって身近なものとして認識すると考えて説明した。
6. エクササイズ「整列しよう」(10分) ねらいは参加者の緊張緩和とコミュニケーション促進である。筆者の教示したテーマ (例: 誕生日や今朝の起床時間など) に沿って、全参加者が一列に並びかえる。最後のテーマで一列に並んだ後、先頭から順番に一組 6~7人のグループ (15個) に分かれさせた。7. と8. のエクササイズはグループ単位でエクササイズを行った。 (工夫点) 7. と8. のエクササイズを行うためのウォーミングアップとして行った。
7. エクササイズ「共通点探し」(15分) ねらいはグループ内のコミュニケーションを促すことである。ワークシート (グループ分) の中央にグループメンバー全員の名前を書き、メンバー全員の共通点を見つけるために 10分間話し合わせた。見出された共通点は白紙にメモさせた。10分後、いくつかのグループに見出された共通点を発表させた。 (工夫点) 8. のエクササイズを行うために、グループ内のアイスブレイクをねらって行った。
8. エクササイズ「タイタニックの乗客」(35分) ねらいは話し合い場面の自分の特徴について考えること、自己主張スキルを高めること、お互いの考え方を知りあうことである。用いたワークシートは、「有沢 (2003) の乗客リスト (人数分)」と「グループ用シート (グループ分)」の2種類である。詳細は本文参照。
9. シェアリング (5分) 本プログラムを通して、感じたことや考えたこと、気づいたこと等をグループ内で一人ずつ発表させた。
10. まとめ (5分) 本プログラムのまとめを行った。 (工夫点) エクササイズ実施時の様子を基に、本プログラムの目的や日頃のクラブ・サークル運営と関連させてフィードバックを行った。
11. アンケートの記入・提出 (5分)